

国史跡石の宝殿魅力深掘り活動

# 魚橋の石碑

●神吉頼定公の末裔を探して



令和4年2月1日

**石の宝殿研究会**



## 目次

### 1. はじめに

貴重な資料が見つかる

- 1) 清水克隆様著書「ルーツのルーツ」
- 2) 橋本政次先生「神吉城の戦いと出井・神吉両氏の関係について」
- 3) 高砂神吉さま保管の手紙類

### 2. 深掘りの関連資料調査

- 1) 「印南郡誌:神吉久太夫の項」
- 2) 「播州印南郡神吉民部大輔頼定合戦之事」
- 3) 「三木合戦:神吉城の戦い」

### 3. 魚橋神吉家の家系図

### 4. 資料類の内容概要

- 4-1) 魚橋の石碑
- 4-2) 清水家の「ルーツのルーツ」
- 4-3) 橋本先生「神吉城の戦いと…」
  - 9章 頼定の室は出井氏の女が
  - 10章 二児升田に匿う
  - 11章 出井氏の子孫
  - 12章 魚橋神吉氏の子孫

### 5. 高砂神吉家のはなし

### 6. 清水家の過去帳

### 7. あとがき

### (付録)

- 出井九郎兵衛 高政の子孫  
(系図)  
播磨の争乱・神吉城の戦



## 1.はじめに

驚きの連続・貴重な資料が見つかりました。

令和2年の春 石の宝殿研究会は魚橋地区のウォーキングを計画し 同地区の歴史や史跡を調べておりました。増訂印南郡誌に書かれた神吉久太夫の人物紹介で 石の宝殿・生石神社の一の鳥居の奉納者で魚橋の正蓮寺にも関連が深くあったからです。村の人からエビ山の竹藪に約20個の墓石と石碑があることを教えていただきました。驚いたことに この碑文の中に神吉頼定公の名前があり印南郡誌に書かれていることを裏付ける貴重な石碑ではないか、どうして今まで市内の史跡資料に書かれていないのはなぜかと不思議に思った次第でした。

2年のウォーキング行事も終わり 令和3年の6月にお墓の持ち主がどうやら高砂市に住んで居られるとのことで 高砂の友人に事情を説明すると何と道を挟んでのお向かいの家が探していた家でした。今日は車があるから家に居られるでしょうとのことで、その足でぶしつけにもご挨拶にしますと 実に急な訪問にも拘わらず丁寧にご対応頂きました。

かつて産婦人科を開業されておられた神吉様でした。また、今はご子息が大阪で開業され 高砂の病院は現在はやめておられました。

初対面にも拘わらず見せていただいたのは昭和40年頃に魚橋の石碑に関するお手紙や本や写真で、亡くなられご主人が残されたもので次のようなものでした。

### 1) 頼定公の末裔清水克隆様の著書「ルーツのルーツ」

昭和43年の著書で、中に同家の過去帳に頼定公と側室の戒名ほか詳しく家系が記されていました。また、祖母の出井かなさんが魚橋の屋敷での生活や出井から神吉、さらに清水家と姓が変わったいきさつなどが詳しく書かれています。

### 2) 姫路の橋本政次先生の調査研究資料

昭和40年に清水様から橋本政次先生に自分の先祖についての調査を依頼されました。先生は大変興味を持たれ79才の高齢にも拘わらず精力的に調査をされて「神吉城の戦いと出井、神吉両家の関係について」を草稿されました。15章にわたる大作ですがそのうちの4章について清水様に送られました。また、清水様と石碑についての意見交換のお手紙もありました。

### 3) 高砂神吉さまの保管の手紙類

昭和62年に他界された神吉十郎様も頼定公の末裔にあたられます。祖先は正蓮寺さんの敷地内で医院を開業され代々病院を引き継がれます。お父様の米次郎さまが魚橋から離れ高砂市で開業されます。昭和55年に神吉十郎さまは正蓮寺さんから橋本先生がエビ山の石碑を調査されたことを聴かれ、また、清水さんの著書「ルーツのルーツ」を読まれます。早速東京の清水さんに連絡を取られ、清水様からは橋本先生との手紙のやり取りや調査状況 また、草稿された調査報告書の4章分の写本が届けられました。そしてこれら資料は奥様によって今日まで大切に保管されていました。

## 2. 深掘りの関連資料の調査

◆今回の発見諸資料がどのような位置づけになるか、頼定公の側室が魚橋村へ落ち延びた記録を過去の史誌の中から数点記載します。

神吉城の戦いで升田村に逃げ延びた助市郎、助十郎については多くの記載資料があり、また神吉村に帰ってから村の復興に努めたと多く書かれています。

一方、魚橋村については増訂印南郡誌の神吉久太夫の項で、子孫とその活躍などが書かれているがその出所の記載がなく今後も調査が必要です。しかしながら今回の一連の石碑、資料類が郡誌の内容を事実と裏付けするものとして十分なものであると考えます。

### 1) 「増訂印南郡誌:神吉久太夫の項」

◆神吉久太夫は神吉民部大輔頼治より出づ、天正六年七月十六日神吉落城の時頼信の室(姫路城主黒田官兵衛の娘)懐胎にありければ 城を遁れて魚橋村に至り出井九郎兵衛というに忍び一子善太郎を産む、……下段のとおり

#### ○神吉久太夫

神吉久太夫は神吉民部大輔頼治より出づ、天正六年七月十六日神吉落城の時頼信の室(姫路城主黒田官兵衛の娘)懐胎にてありければ城を遁れて魚橋村に到り出井九郎兵衛といふに忍び一子善太郎を産む、文祿二年七月善太郎十六歳の時母遂に病死す、出井九郎兵衛之を憐み善太郎を己が養子となし娘こふに配して田畑持山悉く之に譲る、善太郎後に次郎兵衛職信と改名し神吉姓を稱ふ、三子あり、長を善太郎と名づけ家を繼がしめ、三男を次郎三郎といひ後落髪して正運寺覺圓の養子となり、二男は久次郎と呼ひ村内に別家す、久次郎後久太夫と改名す、智略あり、よく家計を治め産を積み其富近郷に及ぶものなし、又よく公益を圖る、寛文中西山新村を開發せしことは町村誌に詳し、口碑に曰く西志方村の内下原村の大池は元伊保莊に水を引かんとて久太夫の築造せしなりと、又曰く魚橋村正運寺の正門及生石村生石神社の御旅所なる能舞臺は同人の一建立なりと、又米田村の内神爪村の東端なる、生石神社の大鳥居には延寶八庚申年孟春吉日魚橋村神吉氏久太夫貞信謹立とあり、然れども今其後断絶して具に其性行を知る能はざれども以上の口碑其他を総合すれば其性行の一端をうかゞふに足るものあり、記して後の研究を待つ。

### 2) 「播州印南郡神吉民部大輔頼定合戦之事」…安楽寺の記録

◆「…十五日(旧七月)ノ夜民部太夫、藤左衛門頼之ヲ召シ、仰ケルハ弟助一郎助十郎ヲ今夜白ヲ出スヘシト有ケレバ、……中略……」

又ココニ民部大輔ノ奥方懐胎ノ身ニ有ケルヲイタワリ足輕ニ命ジテ魚橋村ノ村吏出井良兵衛方ヘ落シ玉フ……」

### 3)「三木合戦:神吉城の合戦」…岡田英雄著

◆頼定の妻は、近侍と共に薙刀で追手を打ち払いつつ高御位山を越えて、魚橋の方へ落ちおびたと言われている。このように魚橋に逃げ延びた側室とその後の子孫の活躍などはこの程度で殆ど記録に出てこない。



### 3. 魚橋神吉家の家系図

本冊子の後段に今回作成の魚橋神吉家の家系図を添付しております。

今回新しく入手した資料によって魚橋における出井、神吉、清水家の主要な家系が容易に書き留めることが出来ました。もちろん時代を経てさらに繁栄したであろうところの多くの子孫までは書けてはいませんが、次に記載します各資料類の内容が容易に理解できるよう、転姓の経緯なども記載し付録資料として添付していますのでご参考にして下さい。

なお、清水克隆様の著「ルーツのルーツ」と橋本政次先生の「神吉城の戦いと出井・神吉両氏の関係」については原文のままを別冊で纏めています。要約を次に纏めてはありますが、さらに興味のある方はこれらの別冊もご一読いただければよりご理解できるかと思えます。

なお、各資料の内容はそれぞれに重複するところもありますが、これらを一つの話に纏めることはかなり難しく、よって以降は各資料ごとに内容要点を記載しますので、重複するところなどはご容赦願います。

### 4. 資料類の内容概要

#### 4-1) 魚橋の石碑

石碑の下 約20%が風雨にさらされ剥奪の状況で 全文が読めないのは実に残念ですが一部推察も入れて 概ね次の内容が書かれています。



- 1) 嘉永2年(1849)の3月に小左衛門頼邦の遺言に基づき、息子頼愛が後に墓を作る……源孟恭士が墓誌を撰す
- 2) 出井家の先祖は橘左近太夫高則で8世高経の時印南野に移住、14世高興が魚橋に住む。
- 3) 15世高政が天正の神吉城の戦いの時 神吉城主頼定が自害、小寺から来た側室は懐妊中で魚橋に逃げて職信を生む。側室は文禄2年7月10日亡くなり、鴻羽山に葬られる。
- 4) 出井家の養子となっていた職信は養父出井高政の指示により神吉職信となる

5) 頼邦は安永7年祖考の業を継ぎ、大庄屋をなし、しばしば藩侯から褒められた。嘉永元年5月晦日に没し、子 頼愛が継いだ。臨終に当たり遺言をして、我が宗中葉以降神吉姓とするものが多く嘆かわしい。旧姓出井に戻すことが宿願であると。

6) 頼愛はこの遺托に従い碑に託して子孫に伝える。

以上 まだ調査中の為 追加修正していきます。碑文の全文が読めないのは残念であるが主要な点は解読できたのは幸いでした。

#### 4-2) 清水家の「ルーツのルーツ」……清水克隆著書より

明治 36 年(1904)横浜の貿易商の内に生まれた清水克隆様は小学生の頃 1911 年京都より同家に住むこととなった祖母:出井かの様より亡くなられる5年間の間に先祖のお話をいろいろ聴かれていました。

- 1) 先祖からの過去帳を大切に持っておられ そこには神吉頼定公と側室の戒名と以降の先祖が書かれていました。
- 2) 出井かのさんは幼少の頃は神吉の姓で魚橋村の大きな屋敷に住んで居られました。祖父頼邦さんが出井の姓は先祖の大切なもので何とか残したいと孫のかのさんに養子縁組をされ出井かのとなり京都の伏見の住まわれます。
- 3) 明治維新後の混乱時に寺奉行であった御主人が早く亡くなられた出井かのさんは子ども8人を大変苦勞をして育てられました。のちに5男(出井保定のちに清水姓に)の清水様が横浜で貿易商を広く営まれておられ 80 才の時に横浜に移り住まわれました。
- 4) 清水克隆様は12歳時 お父様が亡くなられてすぐに お母様に連れられて魚橋の正蓮寺を訪ねます。先祖の供養のため墓と石碑を探されますが見つかりませんでした。お母様も出井かのさんから魚橋村のこと、石碑のことをよく聴かれていたのでしょう。
- 5) 清水克隆様は大学をご卒業、東京銀行勤務や海外でのご活躍のあと、60 才の時に 清水家のルーツをぜひ知りたいとのことで、知人の紹介で姫路の歴史家橋本先生に調査をお願いされました。橋本先生は神吉頼定公の末裔と知り 大変興味を持たれご高齢にも拘らず精力的に調査をされました。
- 6) なお、出井家から清水家に姓が変わった理由ですが、出井かのさんの5男であった清水さんのお父さん(出井の姓)は 18 才の若さで英国に渡り貿易の実務業務を習得されます。当時の日清戦争の関係で徴兵制度が布られました。日本に帰る段になって自分が徴兵制度違反になることが解りました。4男お兄さんが兵庫の区役所勤めをされており、長男は徴兵の対象外であることから清水家の長男籍を取得し手続きをします。



当時は跡継ぎのない家では養子縁組をよくされていました。その後横浜で手広く貿易商を営まれました。

- 7) 橋本先生との交信で出井家の先祖のこと、神吉城の戦い、落ち延びた側室、石碑の内容や、また、出井の姓についての考察など橋本先生の調査の内容も詳しく書かれています。

#### 4-3) 橋本政次先生「神吉城の戦いと出井・神吉両氏の関係について」

橋本政次先生は神戸新聞社の要職を歴任されるほか 姫路城史全3巻や千姫考、播磨考、ジョセフ・ヒコほか多くの本を出され播磨地域の歴史に精通されていました。

- 1) 昭和39年に清水克隆様が知人の紹介を受け 橋本先生に清水家、出井家のルーツについて調査をお願いされました。
- 2) 神吉頼定公の末裔、また、魚橋の墓石などに大変興味を持たれ、清水家の過去帳をもとに精力的に調査を始められます。
- 3) 昭和39年12月頃に清水様が探し出せなかった出井家累代の墓と石碑を魚橋のエビ山で発見されました。
- 4) 神吉城に関する諸資料の調査や 魚橋村、神吉村を精力的に調査され 全15章にわたる大作「神吉城の戦いと出井・神吉両氏の関係について」を草稿されました。その内の9～12章が写本として残されておりました。

9章……頼定の室は出井氏の女か

10章……二児、升田に匡う

11章……出井氏の子孫

12章……魚橋神吉氏の子孫 の4章である

詳細は別冊の4章分を読んで頂くとして  
要点を記述します。



#### 9章:頼定の室は出井氏の女か

- 1) 石碑による出井氏の遠祖は橋諸兄の外孫左近太夫高則からはじまる。
- 2) 子孫高経が印南郡のこの地にすんだ…鎌倉時代であったかも
- 3) 出井九郎兵衛高政の時神吉城の戦いで頼定公の室が魚橋に逃げ延びます。
- 4) 清水家の過去帳では高政の4代前からの系図があり九郎兵衛光則、高義、高直、高昌、高政と代々九郎兵衛を称していた。また、当時は農民となり大庄屋となっていた。
- 5) 頼定公の室は兄の出井家に逃げ込み一粒種の善太郎を産みます。

- 6) 善太郎は出井家の養子となりますが、16歳の時、出井高政の娘”こう”と結婚をし、この機に神吉職信となる
- 7) 出井高政の妹が黒田官兵衛の養女となって神吉家に嫁いだのは、小寺家(黒田)と神吉家が姻戚関係にあり、志方城城主の榎橋伊定がこれをまとめたものと思われる。

この他 魚橋での調査の様様、墓地石碑の発見、なども記述されています。

## 10章:二児升田に匿う

- 1) 神吉城の落城の際、魚橋に逃げた側室の話と共に 助一郎、助十郎の二児が升田に逃げ延びた内容、諸説について詳しく記載されています。
- 2) 逃げた先は西念寺(元佐伯寺)で二児を匿ったとして織田軍に火を放たれます。のちに妙願寺として再興されます。
- 3) この二児は三木城に人質にやられた信常の弟で、頼定の兄民部小輔信烈の子供で信烈が亡くなったときは幼弱で頼定の元で育てられていた。
- 4) 助一郎は幼名吉久でのちに五郎太夫、助十郎は幼名吉安でのち總太夫で中国地方の戦が止んでから神吉村に帰ります。そして村の大庄屋を務めることとなります。



## 11章 出井氏の子孫

- 1) 神吉頼定公のただ一人の子職信が生まれその子孫が繁栄し神吉姓を称し、魚橋の神吉氏はいずれもいわば出井氏から出ているといえる。
- 2) 神吉職信には3人の子供がいて、長子幼名善太郎、次男久次郎、三男が次郎三郎で、長子善太郎が出井氏を継ぎ通称次郎兵衛となる。
- 3) 清水家の記録では長子善太郎は通称次郎兵衛則定、その次が次郎太夫正久、小三郎義信、十郎太夫義邦、小左衛門頼邦、頼愛となります。
- 4) 小左衛門頼邦は庄屋としてしばしば藩侯から褒められました。一方神吉姓ばかりとなり先祖の出井姓を何とか残すよう遺言し、その子頼愛によって娘かなを養子縁組して出井かなとし出井家を繋ぐこととなる。
- 5) そして出井かなの5男出井龜之助保宗の時に清水家の姓となる。

## 12章 魚橋神吉氏の子孫

- 1) 神吉職信の次男久次郎は分家して久太夫といい、魚橋村の大庄屋となり、神吉村の大庄屋五郎太夫の子次郎兵衛が幼少の時、神吉村の





大庄屋も兼帯した。智略があって大いに富を成し、魚橋の土地ほぼ半分を有し、屋敷を構えた。西山新村の開拓、正蓮寺の正門、神爪の鳥居建設など本家次郎兵衛より有名だったが何代目か知らぬが欠所となった。

- 2) 職信の三男次郎三郎は正蓮寺の養子となり名前を賢清と改め、七代目住職となる。賢清に三子あって長子が覚賢が後を継ぐ。
- 3) 賢清の次男は玄昌といい医術を学び正蓮寺東隣に分家し、子孫代々医者となる。
- 4) 三男は別家し神吉伊兵衛といい農業を行う。
- 5) ほか魚橋村の神吉姓の人々の調査を行い記録されています。



ご高齢であった橋本先生は膨大な資料を準備し、第1章…

中国役の発端の書き出しから大作に挑戦されていたと思われます。残念ながら全15章についての原稿は 姫路ほか関係先を調査しましたが発見することは出来ませんでした。何とか将来の研究で発見されることを祈る次第です。

## 5. 高砂 神吉家のはなし

冒頭で述べましたように今回の魅力深掘り活動の発端となったのは高砂の神吉十郎様宅に保管されていた手紙や資料類でした。神吉様も魚橋で生まれた善太郎の三男の次郎三郎(のち賢清)の末裔にあたられます。賢清の子供で医術を学び神吉玄昌として正蓮寺の敷地内に病院を建て治療をされていました。玄昌さんから15代目の米次郎さまが高砂で産婦人科を開業されます。

- 1) 米次郎さまの子、神吉十郎さまが正蓮寺において清水様、橋本先生が調査をされていたことを知ります。調査から15年経った昭和55年のことでした。高砂在住であったため当時の調査はご存じなかったのでしょうか。
- 2) 「ルーツのルーツ」を読まれ、著作者清水克隆様にお手紙を書かれ、同じ末裔としての現況をご報告されます。
- 3) 清水様から調査時の橋本先生・清水様のやり取りの手紙と、橋本先生の4章分の草稿の写しが送られてきました。当時は複写機がなく手書きで写本されたものでした。
- 4) 大変お忙しい時期で資料入手後の昭和62年にご逝去。資料はそのまま大切に奥様が保管されておられました。
- 5) 今年の8月に正蓮寺さんに伺ったときに、十郎さまが書き残された系譜の覚書を頂きました。これによると玄昌さんから代々名前を襲名し、十郎様は16代目に当たられるとのことでした。
- 6) エビ山の墓地は高砂の神吉様が今も大切にお参りされています。また、墓地の20近く先の墓石が医術を始められた玄昌さんの一族の墓でした。



## 6. 清水家の過去帳

本冊子の最終段階において清水克隆さんのお孫さんとの連絡が奇跡的にも取ることが出来、ご挨拶することが出来ました。

著書に書かれた東京のご住所から引っ越しをされて、その後の行先が解らず一時は諦めておりました。東京での調査方法に知恵が無いかと思いめぐらし、昔の会社の同僚の住所を調べてみますと著書の住所近くに毎年年賀状挨拶だけの後輩が住んでいました。

後輩に今までの事情を話し資料を送り、探偵まがいに住所のご近所の聞き込みをお願いしてもらいました。そして遠くでないところにお住まいで何とか連絡を取ってもらいましたところ、何と偶然にも清水様のお孫様と後輩が知り合いで、快くご住所、連絡先を教えて頂き早速関連の書類を送付させて頂きました。

そして どうしても出井かのさんが託され今に大切に引き継がれています過去帳、神吉頼定公ほか皆さんの戒名が書かれた過去帳が見たくなり厚かましくもお願いしました。

某日ご挨拶の時にご持参いただき見せて頂いた時は感動でした。ぎっしり書き込まれた過去帳には「ルーツのルーツ」で書かれた方の戒名や、裏面には清水克隆さんの覚書、俗名などが書かれていました。

個人的な資料のため主要な方のみの写真を掲示させていただきます。また、過去帳を調査していきますが、当初作成した系図で何代かは追加修正が必要と思われ、今後検討してまいります。



神吉頼定公



頼定公側室



善四郎



同側室'孝'

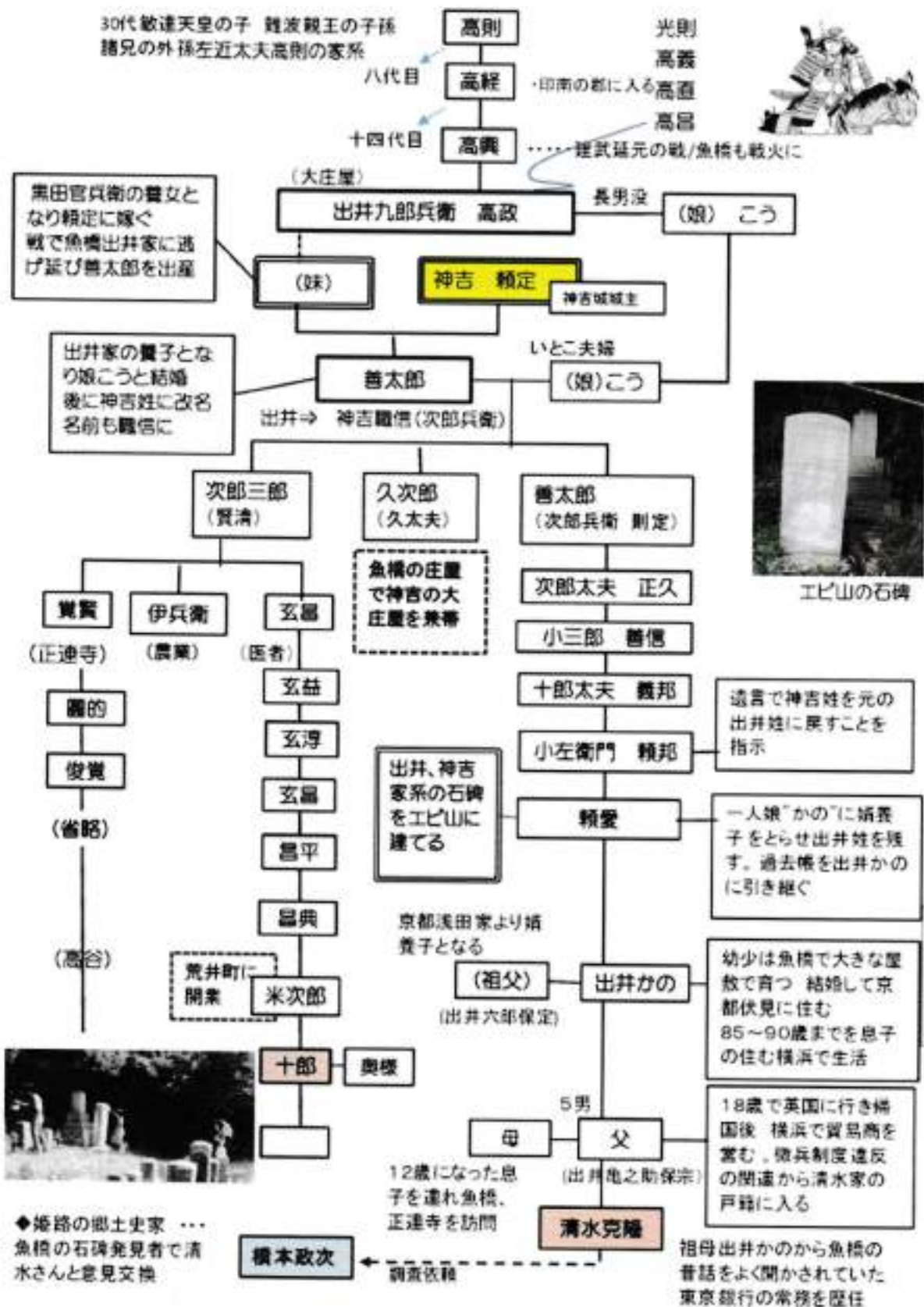


出井かの

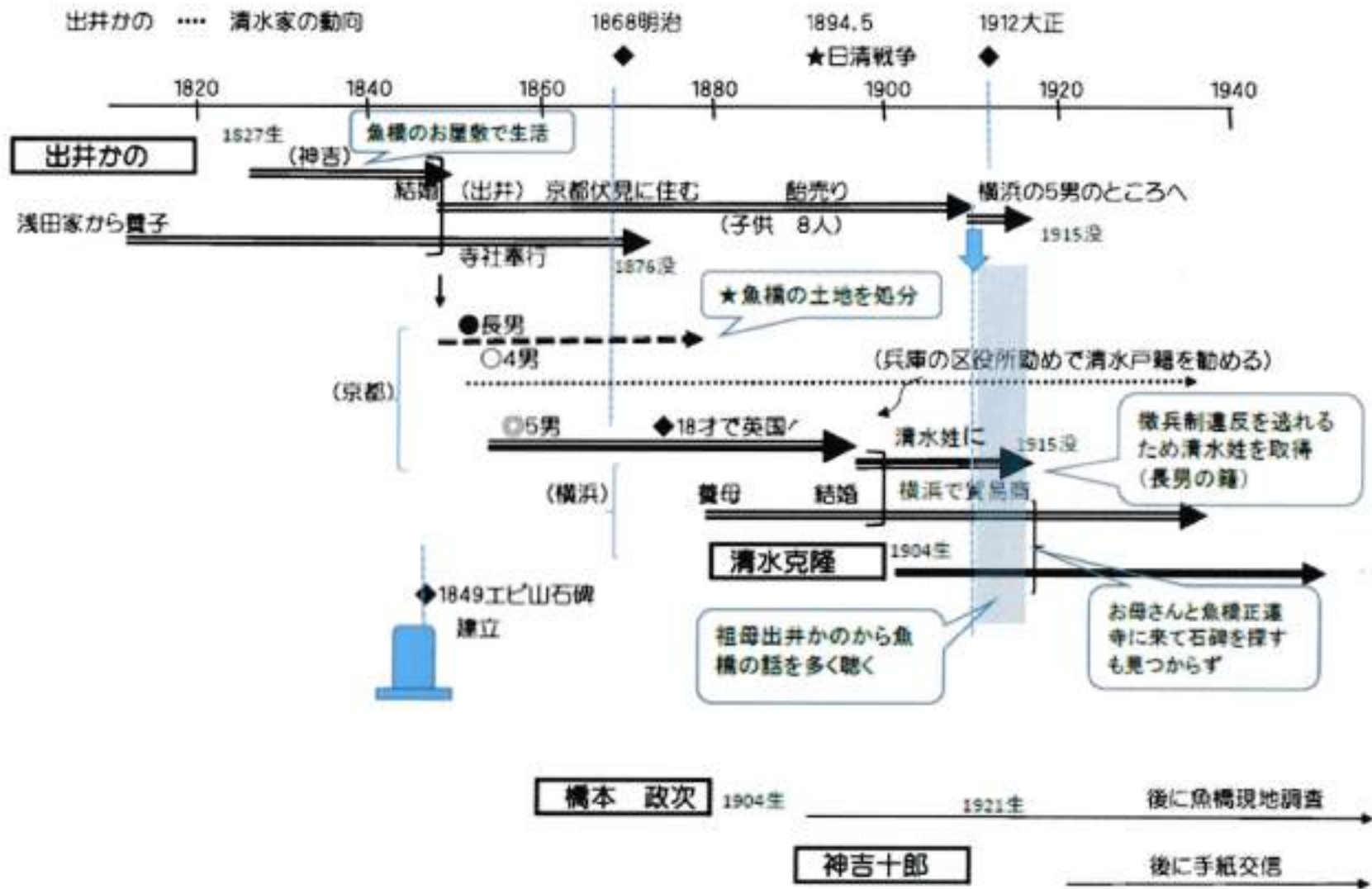


# 出井九郎兵衛 高政の子孫

「ルーツのルーツ」清水克隆ほかより



# なぜ出井姓でなく清水姓か！！



## 播磨の争乱・神吉城の戦

### 天正6年(1578年)の激動

- ◆織田信長と毛利元就の勢力争いを二分する播磨の地において 一時は黒田官兵衛の働きで平穏に織田信長の統治になるかに見えた。  
天正6年2月の加古川評定において、三木城別所長治が感情のもつれから毛利勢につき神吉城ほか校城がこれに従い織田軍と戦うこととなる。

(高砂城、志方城、野口城、端谷城、淡河城…)

- 4月 野口城が秀吉軍に滅ぼされる。
- 5月 織田信忠の率いる本隊が加古川に進軍。
- 7月 神吉城は20日間の激戦ののち落城、志方城も落とされる
- 8月 端谷城が落城、また秀吉軍が合流し三木攻略の総大将となる
- 10月 高砂城の戦で秀吉軍は一時は毛利軍に負けますが、再び取返し三木城への兵糧攻めを開始します。

### 神吉城の戦

天正6年6月27日織田信忠率いる3万の兵に対し、三木、毛利からの応援も含めて神吉頼定率いる兵1700が勇猛果敢に戦います。織田軍の死者も多数を数え、7月15日に一時休戦し、敵味方の戦死者を丁寧に弔います。明けて翌16日に最後の決戦に挑み、力尽き頼定公は自害、神吉城は落城します。

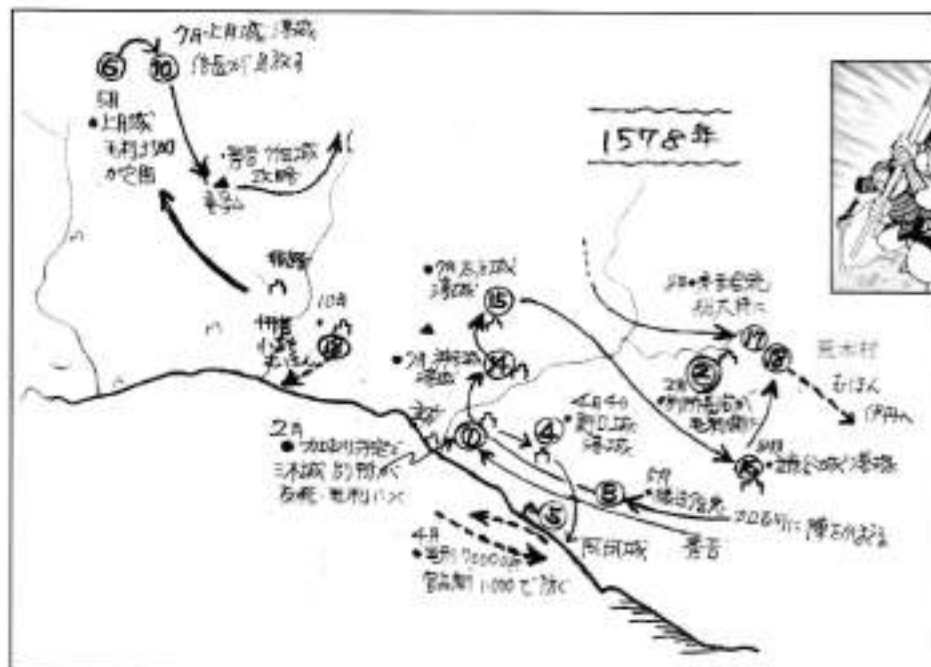
### 天正7年(1579年)の激動

三木城の兵糧攻めと三木城周辺で戦が繰り広げられます。  
三木平井山、丹生山の砦、淡河城、三木大村合戦…

### 天正8年(1580年)

1月 別所長治降服 三木城ついに開城。

神吉城の戦から1年半にわたる三木城別所長治の戦が終わりました。





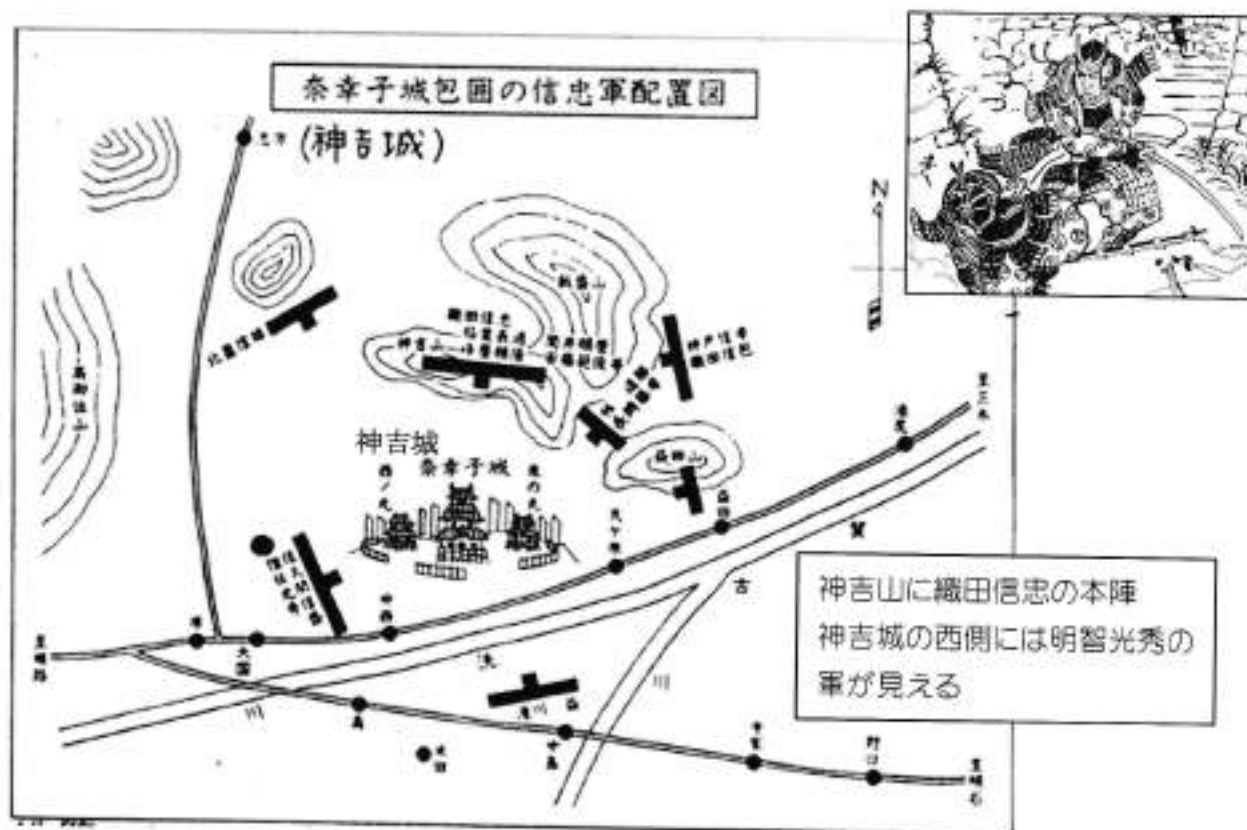
神吉城の本丸と掘割



神吉頼定公の廟



本丸跡に建つ常楽寺





国史跡石の宝殿 魅力の深掘り活動

## 魚橋の石碑

●神吉頼定公の末裔を探して

発行 令和4年2月1日

発行者 石の宝殿研究会

編集 松村 聡

連絡先 080-4021-9095

令和3年度高砂市「夢の代」補助金対象事業